

繚乱

☆◆☆◆☆

小さなテラスにあふれているのは、赤や黄色、白、ピンク……鮮やかな色彩と、むせ返るような甘い花の芳香だ。

そして、降り注ぐ光……光、光の洪水。

そこはまるで、天上の楽園にも見えた。

テラスのガラス窓の向こうは、灼けつくような真夏の陽（ひ）射（ざ）しが照りつけているというのに、完璧な空調のおかげで、ここでは春の陽だまりのような穏やかさだ。

いまを盛りと咲き誇（ほこ）っているのは、すべて香りの高い薔（バ）薇（ラ）の花だった。しかも、幾（いく）重（え）にも花卉を重ねた見事な大輪のものばかりだ。

花に埋（う）もれるように、白い小さなベンチがテラスの中央に置かれていた。

いささか少女趣味とも思えるロマンティックな真っ白いレースのクッションを重ねたその上に、ゆったりとした白いシャツと生（き）成（な）り色の麻のスボン姿のさくらが眠っている。

俺には、光の中にその華（きゃ）奢（しゃ）な背中を包む真っ白な天使の翼が見えた。

もしも神さまがいるのなら、きっとこの青年に誰よりも深い愛情を注いだに違いない。

なぜ俗な人の世に墮（お）とされてしまったのか、不思議でならない。

この世にあることが奇跡に思えるほど、清らかで鮮烈な美貌だった。伴（はん）侶（りょ）の俺がどれだけ褒（ほ）めそやしたところで、惚れた欲目だとは誰も言わないだろう。

先月、とある事件でいっときに大量の麻薬を服用させられてしまったさくらは、ここしばらく体調を崩していた。

クスリがすっかり抜けていることは、専門家の医者が保証してくれたが、だるさが取れないらしい。

もともと丈夫な性質（たち）じゃない。さらに、酷暑の続くこの時期には弱い。

それなのに、やさしげな見かけによらずワーカホリックの典型みたいなヤツだから、階下が事務所になっている自宅じゃゆっくり療養もしてくれなかった。

俺は、さくらの伯父である天（あま）宮（みや）グループの総帥、義（よし）人（と）氏の好意で、別宅の一軒に、夏が終わるまでさくらを預けることにした。

もちろん、仕事が終われば俺もこっちへ帰ってくるし、夜もいっしょに過ごしている。

あまり閉じ込めておくのも気が滅（め）入（い）りそうなので、さくらの体調がいいときには事務所へも連れて行った。

今日は急に午後からの顧客との予定がキャンセルになったので、ちょっとだけさくらの顔を見に帰ってきたんだけど。

ベンチの近くまで歩み寄っても、目を覚まさない。

起こして声を聞きたいような、ずっと可愛らしい寝顔を見ていたいような複雑な気分で、俺は間近にさくらを見下ろした。

ふわりと周囲を風が流れた。

この部屋の空調は、できるだけ自然に近い機能を持たせているらしい。

心地いいそよ風は、さくらのなめらかな頬（ほお）をくすぐった。

「……ん」

長い睫（まつげ）が、小さく揺らぐ。

漆黒の双眸が、ぼんやりと俺を見上げ、無邪気に微笑んだ。

「竜（りゅう）一（いち）……」

まだ寝起きのおぼつかない声で、俺を呼ぶ。

「ああ……」

返事をして、ベンチの傍（かたわ）らに膝（ひざ）をついた。

「帰ったのか？」

「午後からのアポがキャンセルになったから、さくらの顔が見たくなって……」

ようやく、はっきりと目が覚めたらしい。

闇をひそめた瞳が、悪戯（いたずら）っぽく笑う。

「サボっていると、三（み）田（た）村（むら）に叱（しか）られるぞ……」

かつてはさくらを巡って、俺とライバル関係だった三田村武（たけ）彦（ひこ）は、事情があっいまはうちの事務所でアルバイトをしている。

かなり態度のでかいアルバイトだが。

「三田村は、今日は『天宮』に出勤だよ」

天宮グループの会長秘書とうちのバイトを掛け持ちしている三田村は、週のうち二日は天宮の本社へ出勤していた。

「ああ、今日は金曜日か……」

思い出したように、さくらが低い声で呟（つぶや）く。

このところずっと仕事を休んでいるから、さすがにさくらでも曜日の感覚に疎（うと）くなっているようだ。

「じゃあ、麻（あさ）倉（くら）とデートだな」

楽しそうに洩（も）らすさくらに、俺は肩を竦（すく）めてみせた。

三田村と天宮本社の同僚でもある麻倉ケンもまた、かつてはさくらに熱心に求愛していた男の一人だった。

いまは、三田村と微妙な関係にあるらしい。

けれど俺には、あの俺よりでかい男二人の関係が理解できない。それに他人の恋愛より、目の前の恋人のほうに気がなった。

上体を起こそうとするさくらへ覆い被さるように、華奢な肢体をベンチの上へ押さえ込む。

朱い唇へ、吐息を重ねた。

「竜一……？」

無邪気な瞳が、俺を見上げる。

「嫌、か？」

問い返すと、困ったように苦笑された。

「本気でサボるつもりか？」

咎（とが）める口調に、

「半日ぐらい、どうってことない……」

軽く返事をする。

「そんなこと言っていると、客が寄りつかなくなるぞ」

さくらは笑いながら、しなやかな両腕で俺の首を抱きしめた。

「ベッドへ……」

恥ずかしそうな小声で、耳元へ囁く。

俺は、腕の中のさくらを見下ろした。

「ここがいいな」

「明るすぎる」

即座に反論したさくらへ、ニヤリと笑ってみせた。

「だから……ここがいい——」

わざとゆっくりと繰り返す。

「ばか……」

ひっそりと俺を罵（ののし）った唇が、誘うみたいに甘く耳朶を囁んだ。

許されて、もう一度唇を重ねる。

逃げる舌先を追って、引き出すように味わった。

くぐもった音色が、さくらの快感を訴える。

目を覚ましたばかりなのに、いつにも増してやけに感じやすい。

「気持ちいいか？」

囁きながら、耳の中にも舌を這（は）わせた。

※続きは製品版でお楽しみください♪